

翻訳にあたってのヒント

その 71

世の中に知られざる翻訳業界の実態

不まじめな翻訳会社（翻訳者）とまじめな翻訳会社（翻訳者）

翻訳業界では、今も昔も変わらず優秀な翻訳者が不足しているという。なぜ、こんなことが起きているのだろうか？筆者が考えるには、勉強不足・経験不足の翻訳者側にも問題があるが、翻訳者を育成できるような基盤がない翻訳業界側にも問題があるのではとみている。極論すれば、翻訳者とは一種の職人であるから、優秀な棟梁（つまり手本となるような先輩翻訳者）のもとで何年も修行しなければ一人前にならないのではないか？と思えるふしがあるからだ。つまり、数年程度の勉強や経験だけでプロ翻訳者を目指したのでは、自活していくだけの糧を稼げないということだ。正確でなおかついい翻訳をするには年季が必要だし、独立してからも絶え間ない自主的な修練が必要なのである。また、せっかく翻訳業に携わっているが、フィードバックがなかったり、次から次へと舞い込む翻訳の対応にきりきり舞いでフィードバックがあっても復習する時間をつくらせない翻訳会社や時間を割いて復習しようとしめない翻訳者がいるとすれば、そういうことも問題で、こんなことの繰り返しでは、翻訳力は向上しないばかりか悪化を辿るのみであると言えよう。常に新しいものが依頼される実務翻訳の世界では常日頃から勉強が必要なのである。その反面で、中には10年以上翻訳の勉強をしているのに、いまだにプロとして独立できない人もいることも事実だ。こうなると、本人の勉強法に問題があるか、教わっている講師に問題があるかの二点にその原因が絞られることになる。翻訳学校の講師によっては、2年やっても芽が出ない人は「あきらめなさい」と教示している人もいるというが、これは理解できないこともない提言だ。世の中に存在する仕事は何も翻訳だけではないのだから、他の分野で芽が出る可能性がそうした人になきにしてもあらずと考えられるからだ。言い換えれば、不向きで能力がまず伸びそうもない分野に何年も金と時間を費やす必要があるのか？ということに収斂される問題でもある。ただし、勉強法に問題があると思うなら、やり方を変えてみるとか、講師に問題があると思うなら、思い切って講師を変えてみるという手もある。講師によっては、「よくできましたが、まだまだですね」を繰り返し、いつまでたっても独立の足掛かりをつくらせない人もいるようだ。それはそうだろう。彼らにとって生徒を抱えているということは自らの生活の糧となり続け、プロとして独立された暁には、自分の生徒がライバルになってしまうということの意味する。仕事を奪われかねないのである。これとは裏腹に、本来生業であるはずの翻訳では生計が立てられないので、翻訳教育業を本業にしている講師もいるようである。これではその当人がれっきとした翻訳者かどうか疑わしいということになり、その生徒がゆくゆくはそのとぼっちりをくうことになりかねない。数年以上の英語学習歴がある良識のある人に、中辞典クラスの英和

辞書を見ればわかることを、口から泡とばして何度も繰り返されたんでは、しらける一方である。話変わって、プロとして金銭的な面から翻訳者一人を育てるにはどれくらいかかるのかということに着目すると、少なくとも1千万以上の金がかかるのではと筆者は考えている。自分の場合は、学校で2年、通信教育を3年、社内翻訳者業務に約2年間費やした期間を含め、合計7年の期間（通学中とそれ以降の1年半にわたる翻訳のアルバイト業務期間も含む）を経て独立に漕ぎつけている。これは、その間の生活費、交通費、水道光熱費、学費、教材費、辞書購入代、参考書代、講習代、ソフトウェア購入代、ハードウェア購入代、筆記用具、文房具、本棚や必要な備品等々の購入費や諸雑費を含めるとこれ位の金がかかるだろうという試算に基づく。そして翻訳会社に勤務した場合には、（会社からしてみれば）支給される給与もこの金額に上乗せされることになる。仕事の打診があちこちから来るのにやれる人がいないと嘆く翻訳会社、そうした事情があるのに仕事がないと嘆く翻訳者、双方に問題ありである。

そこで今回は、この問題の原因を探るべく、翻訳業界に跳梁跋扈するおかしな翻訳会社と翻訳者を特集することにした次第である。

① 翻訳しない(できない)翻訳会社:

翻訳会社の看板をかかげながら、社長をはじめとする担当者がまったく翻訳しない（できない）会社のことを指す。その売りは言葉巧みな営業力と宣伝力で、肝心要の翻訳に関してはまったくのしろうと集団。機動力と翻訳者の力量のみが頼みの数をこなしていくらの翻訳会社である。当然ながら、こうした会社には翻訳の善し悪しを見極めるノウハウは皆無である。営業出身の社長が経営する会社はこの形態が多いと聞く。中には、お客がそのような実態をまったく知らないことを尻目に、「私（うち）がすべてやりました」なんて大言壮語しておきながら、外国人のお客を前にした途端、まるで借りてきた猫のように押し黙り、「どこか体の具合でも悪いんですか？」と聞かれている人もいるという。人の禰で相撲をとって金を稼いでいることに何の痛痒も感じないのだろうか。そんなことを口にする以前に、己の禰を締めて業務に取り組まない限り、いずれは会社倒産という憂き目に会うことになるだろう。この逆が「まじめな翻訳会社」である。

② 右から左へ受け流すだけの単なるブローカー的翻訳会社:

下請けどころか孫請けである翻訳会社がこの部類に属し、①に類似する翻訳会社。翻訳業界では、翻訳会社でありながら、翻訳会社から仕事を受注している会社が少なからず見受けられ、中にはチェックもせず右から左へのぶん投げ仕事で金を稼いでいるところもあるというからたまらない。元請け、下請け、孫請けの段階で無駄な金を搾取され、いかに楽をして金を稼ぐかということしか眼中にないようなこんな左うちわ的会社に余計な金を取られているという実態があることを、ソースクライアントは知って知るべしである。話はちょっと変わるが、その昔、英訳がまったくできず和訳のみの翻訳に従事していたある翻訳会社の社長がいたが（この点ではまったく翻訳しない翻訳会社よりはましである

が・・・)、この社長の和訳の「てにをは」がまったく適当で、結局その会社が総額で 4,000 万円以上の借金をかかえて倒産してしまったということがあった。いい加減な翻訳をするところなのだ。会社とは社会の公器ともいわれるが、そうした公器（公器とは「社会に役立つもの」のことである）である会社の本来の目的を誤ると、その社会に対する迷惑度は、規模が大きくなればなるほど計り知れないものとなる。生半可な英語力で翻訳会社の社長になってやろうだのと考えてもいけない教訓の一つとしてこのエピソードを記したい。この逆が「まじめな翻訳会社」である。

③ 自称英語通が立ち上げた単なる××翻訳事務所:

自称英語通の主婦などや翻訳学習歴や経験もままならない自称翻訳者が立ち上げた翻訳事務所のこと。自宅の一室を単にオフィスとして使っているだけで、所有辞書数はせいぜい 100 冊程度かそれ未満。翻訳力どころか英語の基礎力にも問題があるような、稚拙な語学力で大切な文書を翻訳してしまうようなこのような人物に仕事を任せてはいけない。この逆が「まじめな翻訳事務所」である。

④ メインは DTP 編集で、翻訳はあくまでも副業の翻訳会社:

こういった類の翻訳会社がやった翻訳は、DTP が本業なので、出来上がりの体裁は非常に見映えがいいが、その中身となるとめちやくちやである。格安の翻訳料金が売りなので、まっとうな翻訳料金を翻訳者に払えず、そのしわ寄せを食らうまともな翻訳者はそのうち嫌気がさし、どんどん翻訳者リストから抜けていくという。この逆が「まじめな翻訳会社」である。

⑤ 海外滞在歴を売り物にする翻訳者:

そもそも英語の語学力と海外滞在年数は比例しない。その証拠に、英米圏の外国に数年あるいは何十年もいながら英語ができない日本人がたくさんいるという現実がある。生活に最低限必要な英語力は、英語がまったくできなかった人でも半年ぐらいで覚えてしまうが、読み書き能力となれば、やはり集中した勉強をしない限り、身につけることは不可能なのだ。英語の実力がほぼゼロに近いレベルからまじめに勉強を続けていくと、知らないことばかりなのでスポンジのように吸収し約 2~3 年で飛躍的な向上を遂げるが（もちろんその内容はほとんど教科書や教材用につくられた英語）、それ以降は頭打ち状態となる。心理学ではこれを高原現象と呼んでいるようだが、基礎を一通り学んだ後から応用への段階に入るとこういったことが起きるようである。これぐらいの学習期間では、特に翻訳をこなしていくにはまだまだ程遠い段階で、このつらい停滞過程を経て勉強を続けていかないと読解力と表現力は伸び悩むだけで結局勉強をやめてしまうことになり英語を使う仕事をするという夢をあきらめてしまうことになる（また、日本人が語学留学しても「87.3%」の人が帰国後も英会話が出来ないという統計もある）。それほどまでお互いに歴史がある英語と日本語という言葉の世界は深く覚えなければならないことが山ほどあるのである。さらに、重箱の隅をつつつくような細かい指図、うるさい事、面倒な事が翻訳業にはつきものでもある。こういった人達が書く英語は非常に粗く、文法ミスが非常に多い。よって使

い物にならない翻訳が出来上がるという次第。この逆が「まじめな翻訳者」である。

⑥ 英米大学出身者で翻訳学習歴・業務歴のない翻訳者:

信じられないことだが、英米大学出身者で一枚足らずの文章でもまともに翻訳できない人がいる。確かに自分が専攻した専門的な英語にはたくさん目を通したのだろうが、他の分野や日本語をあまり勉強していないので、特に日英訳でへんな英語を書いてくる人が多いという。また、単純な手紙文でも、文法ミスだらけの英語を平気で書き、「はいできました」なんてことを平然と口にしていうから驚きだ。英米の大学を出ているというだけで、誰からも英語を直されたことがなく、周りから「英語の〇〇さん」などと普段からよいしょされているもんだから、こんなことになるのだろう。また、業務歴があってもよく勉強しておらず数だけこなしているとなると、質的に問題のある翻訳ばかりをしてしまうようだ。無論、並み居る頭脳明晰な英米人学生を相手に首席、次席、あるいは優等で卒業した人であればそれは大変な荣誉で尊敬に値するが、並みかそれ以下の成績で卒業するのに「私には分からぬ英語はない」などと吹聴している人がいたら、それは許されないことだ。英米人にだって分からぬ英語はたくさんある。彼らがどれぐらいの成績で卒業したかについては謎につつまれ教えてくれない人が多い。中には、親が金持ちや有力者であるため、親の七光りで外国の大学をでたのでは？と思わせるような人も見受けられる（裏口入学や袖の下のおいが漂ってくるのだ。余談だが、日本の元首相 K 氏は学生時代に不祥事を起こし日本にいられなくなりイギリスに 2 年間留学しているがどの単位もまったく取得できなかったという。この当時、氏の父親は防衛庁長官であった）。90%以上が正しい英語と誤った英語を見分けられない人で占められるこの日本で彼らの力量を会話能力や簡単な筆記試験だけで判断してしまうのは禁物だ。その実力を見分けるのは簡単で、英和翻訳と和英翻訳のテストをそれぞれ最低 10 問ずつぐらい受けさせればいい（問題はすべて長文とし、辞書を使ってもよいとするが誰の助けも受けず自分一人で行うこととする。この他に実践的な文法力をみるために 100~200 問ほどの文法試験も受けさせてみればもっといいだろう）。ちなみに社会人の間ではところによっては MBA（経営学修士号）を持っている日本人の英米大学院卒業者が輦轡を買い「まぬけ、ばか、あほ」の別称だと揶揄されているというが、分からぬこともない。特にその在学期間は 2 年程度であり、当然ながら最初から英語力があちらの高校生や中学生にも劣っている小中高大と日本で過ごした人が半年から 1 年程度の英語集中講座を受けた後に、これほどの短期間で英米人の学卒者にもむずかしいような英語の講義を完璧に理解しその内容をさらに日本語に訳し直して咀嚼することなどとうてい無理だろうと思われるふしがあるからだ。4 年制の大学で英文科を専攻しても翻訳できない日本人はたくさんいるんだから、学位を自慢してはいけない。この逆が「まじめな翻訳者」である。

⑦ 資格を売り物にする翻訳者:

英検で?級とった、TOEIC で何点とったということばかりを強調し、翻訳業務歴のない人にこのような翻訳者が多いと聞く。こういった類の試験では、一般英語を中心とした題

材しかとりあげないので、分野別に異なる専門的な英語力はこういった類の試験勉強をいくらやっても身につかない。英検は一回合格すると、その後英語をまったく勉強しなくても英語を使う仕事につかなくても一生合格者のままである。それ故、同じ合格者であっても月とスッポンほどの実力差が生じていく。これが非常におかしな点で、英語に関して変なプライドを持った人が育まれる巣窟となっている。外国のある業界の資格によっては、合格者であっても、毎年定期的な試験を受けて再合格し続けていかないと資格を剥奪されてしまうものがある。日本の英検制度はこうしたことを見習うべきである（特に英検 1 級合格者に対して）。ただし、ある業界の専門分野を取り扱い海外との取引も多い部署に何年・何十年も所属し、業務経験をつみ翻訳の学習歴も豊富で、なおかつ資格をもっている人はこの限りではない。この逆が「まじめな翻訳者」である。

⑧ 英会話講師出身の翻訳者：

ある翻訳会社によれば、翻訳者リストから、英会話講師出身の翻訳者がすべてあとかたもなく消え去ったそうだ。それほど、話し言葉と書き言葉は違うのである。何年・何十年も大切な記録として残る翻訳という仕事を甘くみるとこうなる。この逆が「まじめな翻訳者」である。

⑨ 勉強しない翻訳者：

翻訳の現場にいないと分からないかもしれないが、過去の学歴や職歴に固執しすぎるあまり、勉強しなくても何でも分かったふりをする自称翻訳者がこの業界にいることも事実。信じられないことだが、昔いた職場には、分詞構文が何であるかもわからずして、何十年も翻訳しているという想像を絶する人（元米国留学生）がいた。また、文法的な質問をすると「私、文法知らないんです。聞かないでください」と、これはまた異なことをのたまう翻訳者もいた。基本的な文法すらも知らない翻訳者がいるのである。さらに実務翻訳の世界では、常に新しいものが依頼され、既にやった翻訳とまったく同じものが再度依頼されることはない。語学は一日でもサボるとサビるものである。日々磨きをかけ向上していくことが必要。休みの日はギャンブル三昧、週末はナイトクラブ通いでは目も当てられない。ちなみに、言葉は 10 年でけっこう様変わりすると言われる。過去は過去、昔は昔、大切なのは今この時なのだ。過去の栄光にいつまでもしがみつくとはいいい加減やめにしていただきたい。この逆が「まじめな翻訳者」である。

以上、これにて、翻訳業界の知られざる実態（第 71 回目）終わり。